

日本の野鳥シリーズ

県立図書館のトラフズク

技術営業部 佐藤 弘

人馴れした鳥が増えているという。新潟県立図書館がある鳥屋野潟公園一帯に棲みついで久しい本種の群れが、数年前から図書館入口前の二本のシラカシを 囀りに始めた。もちろん、フクロウ類のことだから人間サマと昼夜が逆だ。付近は人の往来が絶えず、人に距離をおくカラスが近寄らないから、ここならしつこく突っかってくる彼らに邪魔されず昼寝できると考えたようだ。

他に例があるかどうか、野生の鳥かつ政令指定都市でのことだから、利用者が職員も喜ぶまいことか。まるでマスコットだ。だからふくろうの森の図書館を謳い文句に、「利用カード」には知恵の象徴（私にはただの寝ぼけだが）フクロウのイラストが描かれているくらいだ。いきおい植込みに踏み込んで、頭上3mと離れていないトラフにカメラを向ける人が続出したようだ。そこで図書館側は「フクロウが住めなくなるからフラッシュ撮影禁止」の注意書きを木の幹に貼った。これで本当にテキに逃げられずにすむか？

フラッシュなんて平気だと研究者の言う通り、出番の闇夜に瞳孔全開のフクロウ類が、毎度の稲妻の閃光に目が眩むようでは商売あがったりだ。まして昼間、うす目で瞳孔ほぼ全閉に近いならまったく苦にならない筈。それに人は一切危害を加えないことを既に学習済みであるし、悪ガキが木に登ってカメラを構えたら話は別だが、ここのトラフは木の下3mは許容範囲なのだろう。

心配なのはフラッシュやニアミスではなく、根を踏み荒らされた木が枯れないかということだ。本種は居場所がなくなるうえに、もし植え替えに重機でも入れたら、たちまち逃げ出して以後戻らない予感がする。植込みに入らなくても、舗道から群れの五羽すべてがほぼ8m以内で観察できるのだから、植込みを立入禁止にしたらいかがという私の申し出は、なぜか図書館に却下されている。デリケートなサクラなどと違って、シラカシにそんな心配はいらないとでもいうことか。もう、どうなろうとわしゃ知らん。

本種は胸から腹にかけて、トラの縞柄のような虎斑がある中型のフクロウだ。農家には歓迎されるなかなかの働き者のようだ。能天気ミーハーやってるだけの私と違い、研究熱心な若手が本種の食性を調査報告した例がある。それによると、丸呑みにした獲物の不消化なものをペリットとして戻し、甲虫の硬い羽はむしり取っているという。それら断片的なものを拾い集めてどんな種か同定するのだから、専門知識と根気がいる作業だ。

しかし、双眼鏡がいないバードウォッチングも悪くない。



Miss 日本酒グランプリ2014 (初代) 森田真衣さんと 2015 (二代目) 小川佐智江さん



2016 Miss 日本酒グランプリ 長崎代表 田中沙百合さん



2016 Miss 日本酒準グランプリ 2名 (中央は初代の森田さん)

お客様こんにちは。いかがお過ごしでしょうか。各地で桜の開花宣言が相次ぎ、一年の中でも爽やかで過ごしやすい季節が到来し、何となく気分も明るくなってきました。

その桜の開花より少し早い3月10日、京都市にて目にも鮮やかな華の競演、「2016年ミス日本酒最終選考会」が開催されました。激しい競争の地方代表に選ばれた20代の女性たちが、更に最終選考会出場に向けて特別カリキュラムに参加し、様々な体験をします。もちろんその間の立ち居振る舞いも厳しくチェックされます。そして最終選考会当日、大勢の観衆の前で緊張の中、審査員から様々な質問が投げかけられ、ついにグランプリが決定。今年も長崎代表の田中沙百合さんが見事栄冠に輝きました。

しかし最終選考会に残った女性たちもいずれ劣らぬ美と教養の持ち主、今後はミス日本酒はもちろん、地方代表に選ばれた女性たちは各地域において、日本酒を始めとする日本文化の振興活動に努めていくこととなります。そして、ミス日本酒グランプリに選ばれた女性たちは3年間にわたり国内や世界各地を訪問し、日本酒を通して日本文化を伝えていく役割を果たして行きます。このような活動を通して彼女たちは更に深く日本酒を、そして日本文化を理解していくこととなります。そして、そのような彼女たちを見た若い女性が憧れ、後に続いていくことでしょう。まさにヤマトナデシコ育成プロジェクトではないか・・・そんなふうに思えました。今後益々の発展と活躍に期待をしつつ、酒宴に出された美味しい京料理のお弁当とお酒に陶然とした京都の夜でした。

ミス日本酒アドレス www.miss sake.jp

お気通し様
元氣通信
むけ

ミス日本酒日本文化の広告塔ヤマトナデシコ

我が社のお客様は全国津々浦々にいらっしゃるの、出張も全国を渡り歩きます。今月も私は愛知県岡崎市の山間の酒蔵さんに2週間、ステンレスパネル廻室とサーマルタンクの新設工事に行ってきた。仕事の方は有り難い事にお客様、業者さん達の協力で無事、順調に進める事が出来ました。

さて出張先での楽しみと言えば、やはり地元のお酒を頂く事ですが、何故か愛知の居酒屋さんに出ている「地酒」には新潟の銘柄が多かった。「地酒」と言えば地元の酒だろうと言ったのですが、「地酒」はいろんな各地の酒で、特に新潟の酒が多いという事。新潟の者にとっては有難い事ですが、ちょっと違うだろうって思いながら各地のお酒を呑んでました。それと地元の食べ物をするのも楽しみの一つですが、愛知名物と言えば、きしめん、ひつまぶし、味噌カツ、手羽先…、いろいろあるけど、結局名物は手羽先しか食べてなかった気がする。今思うとちょっと残念な気がします。

さて出張での困る事と言うと「方言」でしょうか。今回の愛知では困らなかったですが、場所によっては方言で早口に言われると、何を言われているのか分からなくなる事もあります。2度3度聞くのも悪いなと思いつつも「えっ？えっ？」って聞いてしまう事も度々。日本は北から南までいろんな方言があるので、困る事でもあります。それはそれで楽しめる事でもあります。今回は愛知の地元の大工さんとも仲良くなり、いろんな話もしてきましたが、「新潟の人は方言がないねえ～」と言われ、一緒に居た長岡の人は「そんな事は、ねえがて」。私は「方言だらけだこって」。それでも大工さん「いやいや標準語に聞こえるだら～」…。ん～、まあ話は繋がるから良いか。何ともほのぼのした出張でした。



◆ ちょっと豆知識 ◆ その27 『『デザイン』について考える』 技術営業部 部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)
弊社には、生産部門の中に「設計」というセクションが存在します。お客様から依頼を受けた案件の、基本骨格を立案することをそのミッションとしています。

なぜそのようなことを調べたのかは覚えていませんが、鮮明に覚えているのが、「設計」の英訳が「Design」であったことを知った時の衝撃です。当社で勤め始めた直後のことであつたと思います。

当時の私は、デザインと聞くと、造形、意匠、配色など、どちらかという美術系のニュアンスを強く感じていたが、レイアウト、能力・機種選定、動線、作業計画、こうしたことを練り上げていく作業も「デザイン」であるということを知り、まさに「目からうろこ」でした。

恥ずかしながら思い返してみると、学生時代に学んだ「実験計画法」も、英訳は「Experimental Design」。最小、最短の実験で、最良の結果を得られるように実験系を組み立てることを目的とする統計学の応用学問です。

今回、「デザイン」について書こうと思ったのは、私が知る「イケてる酒蔵の経営者」の傍らに、かなりの確率でデザイナーの方がいらっしゃることにある時気付いたからです。

工業デザインを前職でやられてた方が社長の右腕で活躍するお蔵、外部にお抱えのデザイン事務所をお持ちのお蔵、経営者ご自身が優れたデザイナーの素養をお持ちであるケースも見掛けます。

考えてみますと、酒蔵の経営はデザイン的な要素が多いのかも知れません。

機械の能力選定。設備の配置。人員の動線。日、週、月でのタイムスケジュールと人員配置。米の払出し計画と入荷計画。ラベル、ビン、カートンなどの商品デザイン。会社、もしくは製品群全体のブランドデザイン。蔵の資金繰りや出荷計画も、広い意味で考えればデザインでしょうか。

ビジネスの世界で課題に対する最適解を見付けるのに、一発でそこに至れることは極めて稀です。手持ちのカードの組み合わせを限界までシミュレートし、ベストの回答に近づけていく…。それがデザインの本質のような気がしています。

最後に、私の心に響いた言葉を引用して本稿を閉じたいと思います。

Design is not just what it looks like and feels like. Design is how it works. -Steve Jobs-
(デザインとは、単にどう見えるか、どう感じるかではない。どう機能するか、だ。スティーブジョブズ(成田訳)) New York Times 2003.11.30

★ 遊び相手の一匹、旅先での一匹 ★ **エッセイ** 生産部 島貫 修一

たの・ころ・とんこ・染五郎(初代と2代目)。何のことかという子供の頃の近所の飼い猫の名前。繋がれている犬と違い、放し飼いの猫は絶好の遊び相手だった。時には腕白仲間たちと竹で手作りした弓矢で狙ったなんてこともあったけど、男の子の愛情表現の一つということにしておこう。猫にとっては大迷惑だったろうが。そんな猫との楽しい付き合いで最も印象に残る猫は旅先でのあの一匹ともう一匹。

あの一匹は尾道で出会った。坂と石段の市街地から宿へ戻るために、国道2号線に架かる歩道橋を渡り、駅方向への階段を降り始めたならあれがいた。階段の途中で猫が道路に頭を向けて寝そべっているではないか。これを見た瞬間いたずらを思いついた。

猫に気付かれないように忍び足で階段を下り、猫の1段上に右足、1段下に左足を置き猫をまたいでみた。驚いて逃げ出すと予想しながら。ところが猫は見下ろしている私を「何か用か」といった表情で見上げたが、すぐに道路の方に向いてしまった。それでもしばらくまたいでいたが、うつ伏せの無防備状態のまま動こうともしない。予想は外れた。

この猫は人が自分に危害を加えることなど有り得ないと信じてきているようで、人への警戒心なんか感じられない。きっと街の人達にかわいがられて暮らしているのだろう。

もう一匹は東京の谷中の路地ですれ違ったメタボ猫。路地の奥から歩いてくる猫に対して、ローアングルで構えていたカメラの前を、威風堂々と通り過ぎていった。カメラを睨み付ける目付きも力強く、「どけどけ！猫様のお通りだ」と言わんばかりの迫力があつた。

あの辺りのボス猫かもしれない。

旅行中に猫に出会うと思わずカメラを向けてしまう。定番の美しい景色、おいしい料理と共に、旅先での一匹も楽しみの一つ。次の一匹はどこの何になるかな。

